学べるゲラ

第42回
スポーツ界の性的少数者

※2020年1月の毎日新聞記事を元にした文章です。
校閲し、直すべきところを指摘してください。

自らの性に戸惑いながら女子スポーツ界で活動してきた性的少数者の2人がインタビューに応じ、心の葛藤を語った。競技のために本位でない女性として活動することにためらいを感じ、社会の偏見の前に本心も公表できずにいた。

一人は中部地方出身。競技の実業団チームで活躍し、故障もあって現役引退した。体と心の性が一致しないトランスジェンダーで「心は男性なのに競技のために女性の体を利用している、その時だけ都合よく生まれ持った性別を利用しているみたいで葛藤があった」という。競技生活の晩年に両親に明かすと「あなたはあなた。どうあろうが愛情は変わらない」と温かく応じてくれた。現在は性別適合手術や女性ホルモンの投与を検討している。

もう一人は西日本出身で別の球技の現役選手だ。幼い頃からスカートが嫌で、女性を恋愛対象とするレズビアン。「男にも女にも属さない、中性と男性の間くらい」と感じている。苦労するのはトイレで、私服の時は男性用、チームで集団行動の時は女性用を使う。親友や母には打ち明けいるが、世間の偏見を考えると公表に踏み切れず「自分に正直でない。胸を張って生きられていない」と心の整理がつかない。

「男らしさ」「女らしさ」を強く求める風潮があるスポーツ界は、

ＬＧＢＴなど性的小数者に対する差別や偏見の解消の「最後の関門」と言われる。

日本の動きは遅れていたが、サッカーの下山田志帆選手がドイツの女子リーグでプレーしていた２０１９年２月、「自分らしくいたい」と同性パートナーの存在を公表。下山選手のもとにはＬＧＢＴの選手らが「勇気をもらった」などと連絡が入っているという。